

論文

第二言語環境下における留学生の「文化馴化」の一考察

—L1 と L2環境の中国人アドバイス発話比較を通して—

中 崎 温 子

要 旨

10年余に渡って日本語母語話者と非母語話者の「アドバイス」発話の異同を研究してきた。考察の基軸には、その普遍性・汎用性を活用して、Brown and Levinsonのポライトネス理論を据えている。今稿では、中国人留学生の文化馴化がアドバイス場面でどのように見られるか、比較対象となる本国の中国人大学生の大量のデータも導入し観察した。その結果、positive politeness にしろ negative politeness にしろ、文化性因子が働きかけストラテジーに負荷を与える姿が明瞭に浮かび上がった。中国人留学生は、強い自我自尊を有しつつも他者配慮性の面で日本人大学生のアドバイス行動への傾斜が見られた。一方で、「表現」面でのポライトネス・ストラテジーでは、host cultureである日本語文化の影響を受けていないという結果が認められた。この理由については、中国社会を背景とする敬語に対する言語意識の希薄さと、L2学習者一般にみられる言語処理の合理的ストラテジーの作用が関わっていると推察する。

キーワード：ポライトネス・ストラテジー，L1 と環境と L2 環境，文化馴化

1. はじめに

今稿では、母語環境下と第二言語環境下（日本）における中国語母語話者のアドバイス発話選択傾向の比較から、中国人留学生の日本における「文化馴化」がどのような姿で表れているかを観察する。

Hinkel (1994) は、英語非母語話者である留学生と英語母語話者（アメリカ人大学生）のアドバイス行動を調査し、母語文化によってアドバイス発話の傾向が異なりをみせることを証明した。そして、そのために異文化コミュニケーション上の問題が生起しないよう、第二言語教育にこの認識が正しく生かされねばならないとしている⁽¹⁾。それまで異文化を背景とする称賛表現、依頼表現などの対照分析による「ポライトネス」研究を進めてきた経緯もあり⁽²⁾、このHinkelの論文に触発されて、1997年より、アドバイス表現における異文化の差異の実際がどうであるのか、また、差異の起因するものが何であるのか、具体的に検証・考察することに取り掛かった。

元々、Hinkel以前と今日までを管見する限りにおいて、アドバイス行動に関する日本語母語話者と非日本語母語話者の対照研究は、英語論文においても日本語での論考においても、意外と少ない⁽³⁾。それらは、英米語のソーシャル・スキル伝授に視点をおいた論及であったり、メッセージ行動のずれの指摘であったりするが、数としては散見されるのみである。

以上を受けて、中崎 (1998) では、「日本語を媒体とする異文化間コミュニケーションの一考察—アドバイス行動を分析して—」で、日本人大学生と英語母語話者であるオーストラリア人大学生のアドバイス・パターン3択の調査を行い⁽⁴⁾、その選択理由の記述も分析した。それを踏まえて、日豪のアドバイス行動の差異から、日本語コミュニケーションの特質を考察。また、中崎 (2007) と中崎 (2009) では、Brown & Levinson (1987) のPoliteness理論を主軸に据え⁽⁵⁾、新たに中国人留学生の調査を加えて対照分析を行い、それぞれの文化特有のアドバイス座標軸の異同を考察し、最終的に多様性を糧とするマクロ的世界観を首肯する相互理解のためのコミュニケーションのあり方を提起している。

今稿では、Hinkelが分析した評価結果に立ち返り、拙稿の研究成果の一部基礎資料も援用しつつ新しいデータの分析を中心に、「留学生の文化馴化」ということの観察に焦点をあてる。具体的には、2008年から翌年にかけて集めた中国国内の中国人大学生のアドバイス行動のデータと本学の中国人留学生のデータ結果とを対照し、異文化ホスト国である日本人大学生のデータも介在させながら、その検証と考察を試みるものである。

2. これまでの研究結果

Hinkelが調査した日本人留学生と中国人留学生の数値⁽⁶⁾を含めて、先行の関連資料の提示から始める。

2.1 オハイオ州立大学における英語母語話者と留学生のアドバイス行動

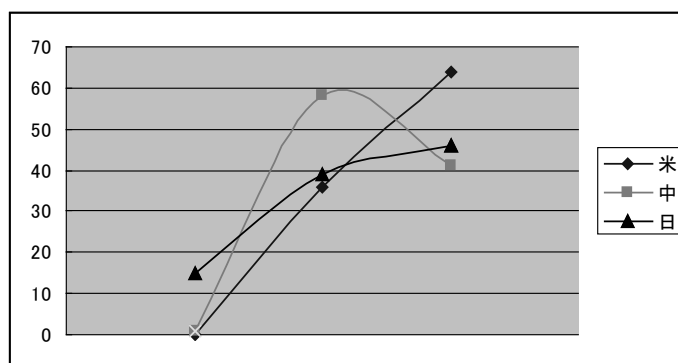
Hinkelは、同じ学部の行動を共にすることもある同級の学生（並びに、身近な教員）に対するアドバイス発話3パターンをそれぞれ8場面ずつ取り上げ調査した。いずれも、有意差 ($p < .001$) が認められている。ここでは、一連の拙稿の研究で取り上げてきた“Menu Choice” のみのHinkelの数値を提出する⁽⁷⁾。

<表1 Hinkelによるアメリカ人大学生と留学生のアドバイス行動調査結果 (%)>

	アメリカ人大学生	(中) 留学生	(日) 留学生
1. 直接アドバイス (DA)	0	1	15
2. 間接アドバイス (HA)	36	58	39
3. コメントのみ (IC)	64	41	46
N値 (100%)	31 (100%)	84 (100%)	33 (100%)

* DAは、Direct Advice, HAはHedge Advice, ICはIndirect Commentの略

この<表1>のアドバイス3パターンの選択結果の散布を比較形態化した図が下である(横軸左から順にDA, HA, IC)。



<図1>

Hinkel は、英語母語話者のアメリカ人と比べ直接アドバイス (DA: Direct Advice) が一定の割合を占める日本人のアドバイス傾向を、先行研究からの語句 ‘strong sense of group cohesiveness’ ‘shows warm interest in the other’s well-being’ ‘based on the assumption that “what concerns one of us, concerns all of us” などを取り上げ⁽⁸⁾、いわば、「仲間意識」ということで説明している。また、中国人のアドバイス行動全般に関し、‘the use of interrogatives and hedging devices is considered an appropriate and common politeness strategy. の引用を紹介し⁽⁹⁾、間接アドバイス (HA: Hedge Advice) が比較的対人関係に丁寧さを与えているゆえ好まれるという分析を支持している。しかし、一方で、‘in Chinese, personal questions, suggestions, and advice “are gestures of friendliness, concern, admiration or interest”’ という見解を引用し⁽¹⁰⁾、中国人にとってもアドバイス行動が「仲間への興味・関心」を表明するためのものであるという意識が存在することに言及している。Hinkel の帰結は、日本人留学生や中国人留学生と、圧倒的に IC (Indirect Comment コメントのみのアドバイス) を好むアメリカ人の「(アドバイスそのものが) プライバシーの侵害」とする態度との異なりを立証するものである⁽¹¹⁾。

2.2 「L2 文化への馴化」に関する Hinkel の言及

このように、アメリカ人大学生と留学生の差異を記述しつつも、Hinkel は、その一方で、留学生が host culture の米語文化の影響を受けている面も認めている。それは、アンケート協力者が、オハイオ州立大学に籍を置く学生で、留学生の TOEFL スコアの平均値も 595 点。1～4 年の米国滞在歴 (平均 1.6 年) をもち、日常的に米語並びに米語文化に接しているからとする⁽¹²⁾。この言及を支える調査や資料の具体的提示はないが、文化や社会は所与の固定したものではなく、言語使用は文化や社会を取り込む性格のものであることを踏まえれば、母語文化内で生得してきたそれまでの価値観や行動が、留学先での生活によって新しいものへと止揚されていったであろうことは十分考えられよう。

3. 2008 年—2009 年の調査

Hinkel のオリジナルを下敷きとして、2008 年と 2009 年に愛知大学の「日本語学」受講の日本人学生 (経済学部, 文学部, 国際コミュニケーション学部の主に 1 年次生選択履修) と、中国人留学生 (1, 2 年次生必修日本語科目と 3, 4 年次生選択日本語科目の履修者), 並びに、中国の大学生 (大連外語学院, 西北外語学院) の 3 者に、やはり ‘Menu Choice’ に限定してのアンケート調査を実施した。

3.1 調査協力者の内訳と調査の内容

日本人学生の有効データ数は270。中国人大学生のそれは228名で、内訳は漢族が圧倒的に多い⁽¹³⁾。中国人大学生は全て日本語学習者であるが、現地での学習歴はまちまちで(平均3.2年)、日本での長期滞在経験はほとんど無い。本学の中国人留学生のデータ数は、182名。いずれも学部生であり、2-4年程度の日本語学習歴(平均3.8年)と2-5年程度の日本滞在歴を有する。中国本国との公平を期すために、中国語での調査とした⁽¹⁴⁾。いずれも、直感的に3タイプのどのアドバイス発話を選ぶかの調査である。今回は、理由も選択とした⁽¹⁵⁾。

<アドバイス発話> (「状況設定」も調査用紙には記しているがここでは省略。注(7)(14)参照)

- (1) 「ハンバーガーは注文しないほうがいいよ。以前、食べたことがあるけど、油でギトギトだったよ」
- (2) 「ハンバーガーを注文するのはどうかなあ。以前、食べたことがあるけど、油でギトギトだったよ」
- (3) 「以前、ハンバーガーを食べたことがあるけど、油でギトギトだったよ」

<(1)の直接アドバイス(DA)を選んだ理由>

- ① 相手のためははっきり伝える
- ② はっきり言うのが性格だから
- ③ コメントのみはそっけない
- ④ 表現として一番伝わり易い
- ⑤ その他(日本語で)

<(2)の間接アドバイス(HA)を選んだ理由>

- ① 後悔させたくないし止めるのに適切な表現
- ② このように言うのが私らしい
- ③ 間接的な表現で丁度いい
- ④ 店の味も変化するし人の好みも分からないからこのように伝える
- ⑤ その他(日本語で)

<(3)のコメントのみ(IC)を選んだ理由>

- ① これで充分伝わる
- ② 性格であるから
- ③ 強すぎるアドバイスは不快感をもたれる
- ④ 感想のみを言って本人の意思で決定すればいい
- ⑤ 店の中なので控えめに
- ⑥ その他(日本語で)

発話3パターンのそれぞれの「選択理由」は、前掲の中崎(2007)の「自由記述」を整理したものである。

3.2 アンケート結果

結果表は、下のようになる。データ数がかなり大きいことや、これまでの日本人並びに中国人留学生の検証値と差がないことなどから⁽¹⁶⁾、アンケート対象者の傾向をうかがい知ることができよう。

<表2 発話選択とその理由>

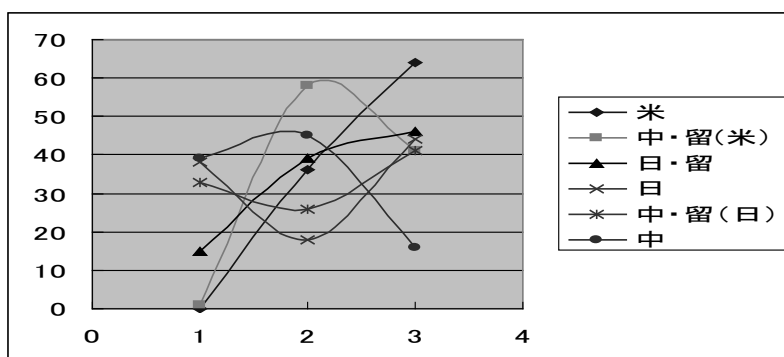
	DA	①	②	③	④	⑤	HA	①	②	③	④	⑤	IC	①	②	③	④	⑤	⑥
日	.102	44	12	2	42	2	49	13	7	20	8	1	119	21	3	8	81	5	1
%	38	43	12	2	41	2	18	27	14	41	16	2	44	18	2	7	68	4	1
留	.60	29	19	2	10	0	46	15	6	8	17	0	76	10	5	9	47	32	2
%	33	48	32	3	17	0	25	33	13.	17	37	0	42	13	6	12	62	4	3
中	88	38	35	0	14	1	104	19	12	18	52	3	36	2	2	3	28	1	0
%	39	43	40	0	16	1	45	18	12	17	50	3	16	5	5	9	78	3	0

*「日」は日本人大学生、「留」は中国人留学生、「中」は中国国内の中国人大学生..斜線太字は傾向が強く表われた数値を示す。

次項で、全体の散布図を Hinkel のそれと重ね合わせて取り上げてみよう (<図2>)。

3.3 対照分析

<表1> <表2> や <図2> から、米国の留学生は、米国人学生の傾向に比較的近い。一方、日本における中国人留学生は、日本人大学生と近似を描いていることがわかる。中国人留学生と中国国内の大学生との差異はICに表れている。中国国内の中国人大学生のICは突出して低い。全体として、米国人大学生と米国に居住する日・中の留学生、日本人大学生と日本に住まう中国人留学生という括りに対し、いずれの関係性にも含まれない中国の中国人大学生が独自の散布を見せていることが明瞭である。

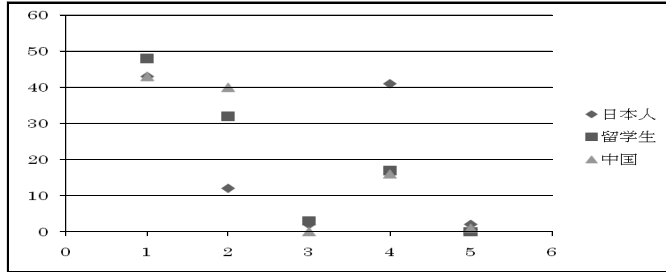


<図2>

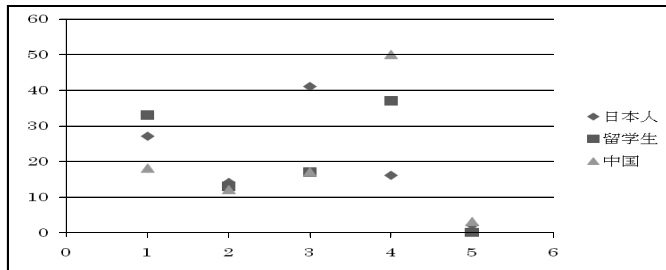
今回の調査における、日本人大学生、中国人留学生、中国の中国人大学生の「理由」別

第二言語環境下における留学生の「文化馴化」の一考察

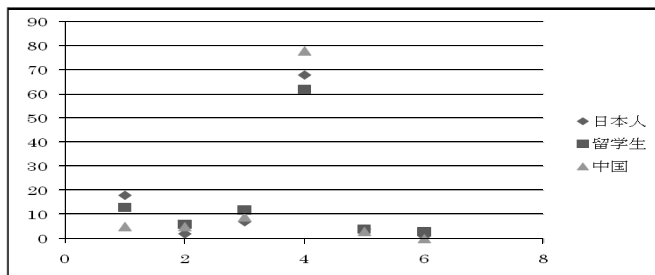
の傾向は、以下の3つの図で示した。順に、DA, HA, ICの「理由」散布図である。グラフ横軸1～6は3タイプの発話のそれぞれの選択理由の①～⑥を表している。



<図3 DAを選んだ理由>



<図4 HAを選んだ理由>



<図5 ICを選んだ理由>

<表2>の太字で示した「理由」個所が<図3, 4, 5>ではよく見える。中国人留学生が中国人大学生と傾向が近似であることはデータの的にも明瞭であるが、DAの「はっきり言うのが性格だから」や、HAの「後悔させたくないし止めるのに適切な表現」「店の味も変化するし人の好みもわからないからこのように伝える」、ICの「これで十分伝わる」の

理由においていずれも、中国人大学生と比べ、留学生の方は、日本人大学生の傾向に近い。次章以降で丁寧に紐解いてみたい。

4. 考察

本稿でも考察の基軸とする Brown & Levinson (1987 前掲) のポライトネスの定理は、非欧米系言語も研究域に入れた包括的で普遍的なものであり、文化差異までを視野に入れたものとして、今日まで広く支持されている。本稿の目的であるコミュニケーション背後の意図と母語各様の「文化性」の差異ということに関わって、まず、定理の簡単な紹介から入る。

4.1 ポライトネスの定理と文化性

Brown & Levinson の定理の重要事項は、以下の三点である。

【1】人間は誰しも Negative face (消極的面子：他者と距離を置きたい、踏み込んでほしくないという欲求) と Positive face (積極的面子：仲間とみなされたい、評価されたいという欲求) の排反する二面を持っている。

【2】コミュニケーションの大抵の場において、この face が侵害される FTA (Face-Threatening Acts: 面子侵害行為) が起こる。これを回避したり保持したりするために、ポライトネス・ストラテジーを駆使することになる。

【3】「FTA の負荷の度合いの式」は $W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$ で表されている。

W_x = ある行為 x の面子侵害度 (Weightiness of the FTA $_x$)

D = 話し手 speaker と 聞き手 hearer の社会的距離 (Distance)

P = 聞き手の話し手に対する力 (Power)

R_x = Rating of imposition 文化内における負荷度

*ただし、具体的な数値で表される「数式」ではない。

【3】の「式」において、今回の調査は D と P を固定した結果を測ったものであるゆえ、アンケート結果は、 R_x 面、即ち、文化差におけるストラテジーの相違のみが表出できるとみなすことができる。その中で、上の【2】のストラテジーに関していえば、直接アドバイス発話は話し手の聞き手に対する主張の押しつけを前面に出すものであり、間接アドバイスは FTA に対する緩和や配慮が伴い、「コメントのみ」は、いわば「伝達事項を明示的に言わない・ほのめかし」(Brown & Levinson でいう 'off record') ということになる。いずれも、【1】の face に対してどうであるのかが焦点となる。

4.2 アドバイス発話の文化性

先の Hinkel では、直接アドバイス発話を選んだアメリカ人大学生は 0% であった。このことは、アメリカ社会においてアドバイス行為そのものが Negative face を脅かす度合いの強い行為であると受けとめられていることの強力な証明に他ならない。Negative face を傷つけない（聞き手の立場では傷つけられたくない）ため、圧倒的多数が off record 「ほのめかし」のポライトネス・ストラテジーである「コメントのみ (IC)」を選んでいる。英語圏のオーストラリア人大学生の調査結果もほぼ同様だった。中崎 (1998a 前掲) での「理由」調査から、IC を選んだオーストラリア人大学生は、求められもしないアドバイスを嫌がる、決定権は受け手が判断する、等々の考察を裏付けるものであった。以上のことから、【3】で示されるところの、何を最もポライトであると位置づけるかは、言語ストラテジー（対人関係調整装置いわば文化性）によって異なることが明白であり、アドバイスというコミュニケーション行為も、強く文化の衣を纏っているといえよう。FTA に対する負荷度にそのまま反応するといえるのである。

4.3 アドバイス発話にみられる日本語文化

一方で、日本人大学生や中国人大学生のかなりの割合は、アドバイスは「親切行動」とし、DA を選択している。そこで、この項では、後項の L2 環境下にある中国人留学生に関する考察の前段として、DA を選択した日本語社会のポライトネス・ストラテジーを中心に言及しておく。

Brown & Levinson のいうポライトネス・ストラテジーには、「敬避」的な方向性だけでなく、それとは反対の“共感”的な方向性（滝浦, 2008）も示されている。また、事例は異なるが、陣内 (2006) の「近づかない配慮と近づく配慮」という二面性でも、定理の【1】【2】でいう両面、即ち、Negative Politeness と、その対局の Positive Politeness が語られよう。英語圏のアドバイス発話では圧倒的に前者のみであったが、他方の、聞き手との共有性や親密性を重視し聞き手との安定した位置取り（つまりは「仲間」ということ）に自己の存在意味を求める積極的 face を満たすストラテジーが存在するのである。日本人大学生の 43% が「相手のためはっきり伝える」、41% が「表現として一番伝わりやすいから」を選んだのも、【2】の Positive face を満たすための Positive ストラテジーが働いたためと考えられる。そして、「相手のことを慮」りそのための「伝達性、効率性」を重視し直接的なアドバイス（指図）をする背後には、対人配慮と同時に、相手も受け入れてくれるという暗黙のメカニズムが働いていると考えられる。もし聞き手に受け入れられているという保障がなければ、<図 2> のアメリカにおける日本人留学生のように「間接アドバイス」

を選ぶ傾向がもっと大きいはずである。なぜなら、日本人は、言語形式として極めて体系化されている「敬語」や豊かな待遇表現形式、即ち、対人距離化の言語手段としての Negative Politeness のためのストラテジーを豊かに有しているわけであるから。

今回、「コメントのみ (IC)」を選んだ日本人大学生も 44% 存在した。この傾向は昨今強まってきたことも観察されている (中崎 2009 前掲)。日本の若者が「対人との距離を置く」人間関係設定に心地よさを感じてきている表れである。「長らくフスマ・障子の文化」(芳賀 2004) だったものが「鍵かけが可能なドアの文化 (個室性隔離性)」へと生活様式が移行したことが背景にある。

しかし、聞き手におもねる日本語コミュニケーションの特有性として認知されているウチ同士の指示表現「あれ、あれ」のコミュニケーションや、「授受表現」にみられる相手に対する一種の期待型 (中崎 2000)、鈴木 (1973) の人称詞で言う「共感的同一化」、牧野の「ウチ人称」「ソト人称」の分析、(1996) 古田 (1996) の「三人称不在」のコミュニケーション等々に見られるように、アドバイスでの直接的発話行為が今なお大きく市民権を得ている背景には、聞き手依存性を含有しながら人間関係を築いていこうとする日本語文化が未だに色濃く存在するからと考えられる。

4.4 アドバイス発話にみられる中国語文化

では、中国人のアドバイス発話における選択傾向はどうであろうか。これまでの表や図から中国にいる中国人大学生に焦点をあてて観察したことをまとめると、まず、全体の構図として、

1. 中国人大学生は IC に消極的である。
2. 間接アドバイス、直接アドバイスの順に%が高いが、その差はそれほどない。いずれにしても、Negative なり Positive なりの働きかけストラテジーがみられることは明らかである。
3. DA の理由では、②の「はっきり言うのが性格」と「性格」を前面に押し出している。一方で、DA の理由④の「表現」へのこだわり (理由付け) は日本人と比べ低いとみなせよう。
4. HA の理由では、④の「店の味も変化するし人の好みも分からないからこのように伝える」が 50% を占め、③の表現の適切性・妥当性を考慮する日本人の傾向とかなりの異なりをみせる。

以上のことが分析される。これらから、中国人大学生のアドバイス行為は、「仲間への興味・関心」を何らかの形で表明する (これは、2.1 の項の Hinkel の引用でも認められている) ものであることが第一に言える。他方、間接的なアドバイスを選んだ中国人大学生の理由は、上の分析 4 に示されるように、情報や根拠の不確定さのために主張を前面に押し出せ

第二言語環境下における留学生の「文化馴化」の一考察

ないということが緩和的装置として働いたためと考えられる。

このあたりを考察するために、以下の園田 (2001, 2006) による中国人の3つの行動原理に着目してみよう。

面子 関係 人情

園田は、中国人の行動原理の第一に「面子」を挙げ、中国的尊大さの根源とする。下の表は、日本人との比較で取り上げたデータの一例である⁽¹⁷⁾。

<表3 日本人と中国人に見られる自己評価の違い (%)>

	日本	中国
1 一生懸命勉強し、非常に有能な人材だと評価するだろう	0	3.5
2 よく勉強し、よい人材だと評価するだろう	8.1	27.1
3 人並みだと評価するだろう	65.5	58.8
4 なまけものだとは評価するだろう	26.4	7.1
5 無回答	0	3.5

中国人の強い自尊感情は、他人からの自分に対する評価や他人を評価した場合と大きくギャップがあることも報告されていて興味深い。確かに、中国国内では、自己主張のぶつかり合い罵倒し合いは街角でも珍しくない光景である。自尊心を率直に発現する強い生き方は、日本人の「面子」の概念とは明らかに異なろう。

中国人の「面子」は、英語圏のface中心の個人主義とも別物のようだ。Brown & Levinsonの【1】の「侵害されたくないface」があり、それゆえ、公共性を守っておこうとする欧米人と比べ、中国人は公共道徳というものにあまり関心がないようだ。その光景は、北京オリンピックや上海万博などでよく映し出されている。園田に言わせれば、「個人主義」ではなく「自我主義」だということになる。この差異が、上の分析1のICの低さに表れていよう。

直接アドバイスや間接アドバイスを選んだ多くの中国人大学生は、アドバイス行動も人間関係を紡いでいく手段と考える。王 (2005, 2006) は、多民族国家であり主張しあわなければ互いのことが分かり合えないゆえ自己主張が強い、しかし、自己主張が強い一方で、異なる民族と共存するために心を割って話し合うという社会的な経験も積んでいるという。個性と社交性が矛盾せず同居する、自我主義と他者配慮性が一人の個人の中に共に

あるということなのであろう。だが、その「配慮性」は、日本人の「発話表現」に対するこだわりとはまた異質である（分析3と4）。それゆえ、日本に来たばかりの中国人留学生の多くが、日本人が何を考えているかわかりにくい、日本語の婉曲表現や曖昧表現は解釈に窮するという心情を抱くに至るのである。

日本語話者が断定的な表現を避けるのは、「以心伝心」に裏打ちされている文化背景があるからである。前項でも記しているが、日本語話者の他者に対する配慮性とは、いわば、他者におもねる「他者依存性」ということである。両者の違いは、辻（2007）における企業内コミュニケーション研究のポライトネス観⁽¹⁸⁾や、施（2007）の、定型性の高い日本語の挨拶表現と実質性が高い中国語表現の対照研究による、日本人の集団意識や他人と同じように行動しようとする横並び価値観と中国人の価値観の相違研究でも明らかとされている。

中国人の場合、他者への配慮、あるいは、他者との関係重視ということの内実には、密な人間関係がともすれば「身びいき」などを生んでいることと関係しよう（園田 2006 前掲）⁽¹⁹⁾。中国では公は私の集合体であり私の公への関与が認められているケースが多い。園田は、行動原理の3つのキーワードを用いて、個を中心とした「関係性」が「面子」と関わって「人情」をバランサーとした感情的基盤を作り上げているとする。このことから、つまるところは、「自己＝一家」の関係主義が、働きかけアドバイスの根源にあると考えてもいいであろう。

4.5 留学生の発話にみられる日本語文化馴化

中国語社会でのアドバイス・ストラテジーとその背景を前項で考察しているが、それが、ホスト社会のポライトネス価値観と交錯するとどのような姿が観察されるか。〈図2〉にみられるように、アメリカ在住の日・中留学生はアメリカ人大学生と比較的近似を描いた。これは、中国国内の中国人大学生のICとの差などに端的に表れている。また、日本にいる中国人留学生は、合わせ鏡のように、日本人大学生とかなりの近似の傾向がみられた。具体的にみれば、〈表2〉と〈図3〉〈図4〉〈図5〉のデータから、中国人大学生と中国人留学生のL1とL2環境下（日本）におけるアドバイス発話傾向の対比は、次のように分析できよう。

1. DAに関して、中国語話者の理由②の「はっきり言うのが性格だから」とする理由付けは、留学生においてやや弱まっている。
2. DAの理由④の「表現」に関しては、留学生の日本人への傾斜はみられない。
3. HAを選ぶ中国人の心理は、何よりも、「店の味」や「他人の好み」に対する確信がもてない

第二言語環境下における留学生の「文化馴化」の一考察

から間接的にアドバイスするというものであった(理由④)。ここでも、留学生の数値はやや弱まり、むしろ、①の「後悔させたくない」への傾斜が見られる。これは、日本人の割合をも上回っている。

4. HAの③の「間接的な表現で丁度いい」では、留学生も日本人大学生の傾向とは距離を置いたままである。この点で、「間接表現を好ましいとする」としたHinkelの引用(2.1)の分析とも異なることが明らかとなった。

上の分析1で明瞭であるが、中国人の「性格」を理由とする押し出し(自己主張)が留学生ではやや弱まり、分析3.では、自我自尊意識の濃淡よりも、「相手に後悔させたくない」という聞き手への配慮が優先している。これは、中国人の「他者配慮性」とも考えられるし、また、「日本的共同体の自己滅却による『和』を最高の徳目とする」(安藤 1986, 2004)日本語社会の協調原理が、行動面一般に中国人留学生の自我自尊性の一定の抑制につながっているということもできよう。

分析の2や4の「表現」への関心の薄さということでは、まず、田中(2010)が参考になろうか⁽²⁰⁾。田中は、日本語力が高いほど、また滞日年数が長いほど、挨拶や呼称など表面的な儀礼的行為は日本語社会的になっていく傾向が強いこと、しかし、本心と違う行為、例えば社交辞令などは、比較的その傾向が低いことを調査している。この結果は、中国人留学生が間接アドバイス、延いては、表現(の間接性)にそれほど興味がないことの一考察となりはしまいか。彭(1999)についてもみてみよう。彭は、中国辛亥革命以降の社会的変化の中で、中国語から敬語が消失し、率直明快な言語行動により高い価値を見出したという言語意識の変化が起こっているとする。さらに、「中国社会はイデオロギー優先の社会から経済優先の社会へと再び変貌し始めた。九〇年代の中国社会では、特に文革中に生まれ育った世代の人々にとって、『君臣、父子、男女、上下、尊卑』などの陰陽秩序に基づく儒教の礼儀礼法などは遙か遠い昔の存在」となったことを述べている⁽²¹⁾。「表現」の「文化性」(Politeness ストラテジー【3】)ということの背景には、中国史のドラマスティカルな変化の影響があるのである。

5. おわりに

コミュニケーション行動は目的指向的であることから、話し手と聞き手の関係を調整する機能が然るべく配慮されている。ポライトネスの定理ではそういった普遍性が反映されていた。その定理に沿って、今稿では、日本人大学生、日本で学ぶ中国人留学生、中国の中国人大学生の三様のアドバイス発話選択を観察した。留学生と日本人大学生の選択傾向

は近似の形態をとり、直接アドバイス (DA) においていずれも Positive ストラテジーを対人心理としつつも、その実は、いわば、中国の自我自尊の強い「スル」文化に対する日本語の聞き手依存的な「ナル文化」ということが考察できた。また、英語圏の留学では、中国人は、間接アドバイス (HA) やコメントのみのアドバイス (IC) に大きく影響されていたが、日本における調査では、前者の HA においては、(英語はともかく) 日本語における間接表現性には傾斜していないということが見えてきたように思う。後者においては、本来的には、その人間関係性から、中国国内の中国人大学生は IC には関心がないということが明瞭となったのではあるが、日本人の IC への傾斜につれ、中国人留学生も同じ傾向を示していることがわかる。

彭 (2002 前掲) は、敬語の衰退を取り上げながら社会変化に敏感に反応していく言語の他律性について述べている。このことは、異文化の地にある留学生の言語行動にも当てはまろう。多かれ少なかれ、また個人差もあろうが、修正や置換を取り入れながら、対人関係で心地よい着地点を見出そうと努めるのが (異文化) コミュニケーションの自然な姿である。また一方で、野田 (2001) の指摘するように、学習言語では、合理的かつ効率的な言語処理ストラテジーの心理も働く⁽²²⁾。本稿では (日本語に対する) 「表現」への執着の希薄さにもその姿が表れていると観察できるが、どうであろうか。

注

- (1) Hinkel は Summary and Conclusions の最終文で、... it appears that, in L2 speech acts of friendliness, NNSs rely on their L1 judgments of conversational appropriateness and politeness and need to be taught the topics and formulate pragmatically-appropriate in L2. と書く。* NNS = Non Native Speakers
- (2) 1997年の拙稿の「称讃表現」と1998年の「依頼表現」はいずれも日・英語対照分析研究 (記述) である。
- (3) Hinkel論文では、Li-Shin (1988), Hinkel (1994a), Kitao (1989), Matsumoto (1993), Lebra (1976), Masuda (1989) を取り上げている。日本語論文では、北尾 (1988), 東 (1997), 鶴田他 (1992), 脇山 (1996) など。現在、手元にあるものは引用文献で示した。
- (4) かつて勤務していた西シドニー大学のオーストラリア人大学生65名への協力依頼と当時勤務していた北陸大学の英米語学科の学生97名などが対象。
- (5) politenessは必ずしも所与の「丁寧さ (敬語や待遇表現)」形式に依拠するものばかりではない。コミュニケーションを心地よく進めるための配慮の言語表現 (行動) のような人間行動の普遍として存在する (広義の概念)。Brown & Levinson の定理は、ポライトネス理論として最も妥当性が高いものとして広く使われている。
- (6) Hinkelは、アメリカ人大学生31名、非英語話者のオハイオ州立大学の大学生172名 (中国人84名、

第二言語環境下における留学生の「文化馴化」の一考察

日本人33名以外にも、韓国人16名、インドネシア人16名、アラブ人13名、スペイン人10名)を対象としている。

- (7) Hinkelは8場面で、3タイプのアドバイス(直接的, 間接的, コメントのみ)のいずれを選ぶか尋ねている。しかし、例えば、寒い日に教員にコートを買うことをアドバイスする、同級生に雨の日に傘を使えばとアドバイス、教員に子供を作ることを……)等々、日本では現実的ではない場面も多く、また、内容的に重なり合う状況の項目もあったりした。そこで、You and K.C. are in a restaurant. While you are both looking at the menu and trying to choose what to order, K.C. says something about ordering a hamburger. You ordered a hamburger in this restaurant before and, in your opinion, it was really greasy. You can say to K.C.: この1項目で充分調査趣旨がかなえられると考え、アンケート用紙では「状況」の説明も取り入れて調査した。
- (8) Hinkelが引用しているのはMasuda (1989)からのものであるが、入手できていない。Masuda, V. 1989 People as individuals. In Gilfert, S. (ed.), *Cross-cultured orientation* (pp.29-36). Nagoya, Japan: Third College of Languages.
- (9) Hinkelが引用しているのは、Hu, W. and Grove, C. (1991). *Encountering the Chinese*. Yarmouth, Maine: Intercultural Press
- (10) Hinkelが引用しているのは、Lii-Shin, Y-h. (1988). *Conversational politeness and foreign language teaching*. Taipei, Taiwan: Crane Publishing.
- (11) Hinkelは、他の非英語話者もIC(コメントのみ)を好むアメリカ人大学生とは異なると帰結している。
- (12) この部分では、NSs and NNSs similarly recognized the social distance between the social superior and the peer. としつつも、さらに続けて Nevertheless, NNSs opted for substantially more direct and hedged advice to the superior than did NSs. と記述する。 *NSs=Native Speakers
- (13) 民族調査も基本項目に入れたが、例えば中国の遼寧省大連においてさえも、満族は大連外大の協力者のうちの14名で、その他の少数民族では多くが1名ずつといった状況であった。民族毎の分析は不可能であるまた分析のための資料も得にくいと判断せざるを得なかった。
- (14) 状況(設定)も全て中国語で。【场景】在某家西餐店里, 和你一起的一位同学正准备买汉堡包。这时, 以前曾在这家店吃过汉堡包的你想告诉他, 这里的汉堡包不好吃。
- (15) 今回の調査の場合、中国国内の中国語環境内で実施されているので、その他の「理由欄」に中国語での記述が出てくる可能性もあることが想定された。そうなると対応できない。
- (16) これまでの一連の研究で、 χ^2 検定などで検証したものを踏まえている。
- (17) 出典: 園田茂人 1991『『関係主義』社会としての中国』辻康吾他編『もっと知りたい中国II 社会・文化篇』弘文堂から園田が引いてきている<表>。日本と中国の大学生を対象に行ったアンケート調査結果。
- (18) 辻(2007)の調査で、「中国人スタッフとのコミュニケーション摩擦が起きる場面」で最も多いのは「相手に注意する場面」という結果が出ている。そこでは、日本側が婉曲な表現を用いるためミスが改善されないと指摘している。中国人は「注意されているのかされていないかわからない」ようである。「ちょっとだめだな」の「ちょっと」の多義的な意味が理解されないため「少しだけ気をつければいい」と受け取られるという。以心伝心文化がいかに異文化理解の障壁となっているかの実例である。

- (19) 「将来あなたが要職についており、能力はないが昔からの友人があなたのところに来て職を求めてきたとします。このような場合、どうすべきであると考えますか」という問いに対し、日・中の回答は

	日本	中国
1. 絶対に職を与えるべき	3.4	9.4
2. できれば職を与えるべき	56.7	71.8
3. どちらともいえない	26.4	8.2
4. できれば職を与えない方がよい	12.6	3.5
5. 絶対に職を与えるべきではない	1.1	7.1

* 出典：園田茂人『「関係主義社会」としての中国』（注（17）と同著所収）

- (20) 田中（2010）は、在日留学生を対象とした研究で、異文化適応とソーシャルスキルの関わりを論じている。田中論文では、文化への関わりが個々に多様であるため適応への効果査定複雑性を課題としているが、21項目のスキルリストで確認した結果が本稿の記述である。
- (21) 14世紀から20世紀90年代までの長編小説にみる敬語衰退過程の調査による。
- (22) 野田は、学習者の立場から、学習者が、母語話者自体にもゆれが見られたり、習得したとしてもそれほど大きな成果が得られない複雑な表現では、それを習得せずに単純化したりするのは、合理的、効率的で理にかなっているとする。

引用文献

- Brown, P., and Levinson, S. 1987 *Politeness: Some Universal in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hinkel, E. 1994 *Appropriateness of Advice as L2 Solidarity Strategy*. RELC Journal, 25, 2, pp.71-93
- Matsumoto, Y. 1989 *Politeness and Conversational Universals—observations from Japanese* Multilingua 8 pp.207-221
- 東照二 1997 「第4章言語とコンテキスト：社会言語学の理論」『社会言語学入門』pp.119-141 研究社出版
- 安藤貞雄 1986, 2004 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
- 王敏 2005, 2006 『中国人の愛国心 日本人とは違う5つの思考回路』PHP 研究所
- 北尾謙治/北尾 S・キャサリン 1988 「ポライトネス」『日本語学』3月号 pp.52-63
- 鈴木孝夫 1973 『ことばと文化』岩波新書
- 施暉 2007 「日中両国におけるあいさつ言語行動についての比較研究——家庭でのあいさつを中心に」
- 彭飛編『日中対照言語学研究論文集』pp.121-148 和泉書院
- 陣内正敬 2006 「ぼかし表現の二面性—近づかない配慮と近づく配慮」『国立国語研究所報告 123 言語行動における「配慮の諸相」』pp.90-115 くろしお出版
- 園田茂人 2001, 2006 『中国人の心理と行動』NHK ブックス
- 滝浦真人 2008 『ポライトネス入門』研究社

第二言語環境下における留学生の「文化馴化」の一考察

- 田中共子 2010 「異文化適応とソーシャルスキル」『日本語教育』146号 pp.61-75 日本語教育学会
- 辻周吾 2007 「中国日系企業に従事する日本人と中国人とのコミュニケーションに関する調査研究——注意喚起表現, 依頼懇願指示表現, 賞賛表現, 断り表現の特徴及び誤解や摩擦の解明をめぐって——」飛編『日中対照言語学研究論文集』pp.453-482 和泉書院
- 鶴田庸子/ポール・ロシター/ティム・クルトン 1992 『英語のソーシャルスキル』pp.151-172 大修館
- 中崎温子 1997 「異文化間コミュニケーションのための日・英語対照分析: 称讃表現」『北陸大学紀要』第21号 pp.219-229
- 中崎温子 1998a 「日本語を媒体とする異文化コミュニケーションの一考察——アドバイス行動を分析して」『多言語多文化研究』第4巻1号 pp.74-82 JALT Bilingualism N-SIG
- 中崎温子 1998b 「依頼表現にみる日・英対照分析—ポライトネスの観点から—」『英語表現研究』第15号 pp.39-47 日本英語表現学会
- 中崎温子 2000 「授受表現における人称詞ハイアラキーの相対性——「あげる」系を中心に異文化コミュニケーションとの絡みで——」『北陸大学紀要』第24号 pp.217-228
- 中崎温子 2007 「ポライトネス理論からみるアドバイス行動——円滑な異文化コミュニケーションのための一考」『愛知大学文学論叢』第136号 pp.1-20 愛知大学文学会
- 中崎温子 2009 「日本人(学生)のアドバイス発話の一考——ポライトネスの観点から——」『JALT日本語教育論集』第10巻1号 pp.19-28 JALT-JSL-SIG
- 野田尚史 2001 「学習者独自の文法の背景」『日本語学習者の文法習得』pp.45-62 大修館
- 芳賀綏 2004 『日本人らしさの構造』大修館書店
- 古田暁 1996 「異文化ということについて」古田暁監修, 石井敏也著『異文化コミュニケーション』pp.2-13 有斐閣選書
- 彭国躍 1999 「中国語に敬語が少ないのはなぜ?」『月間言語』11月号 pp.60-63 大修館書店
- 彭国躍 2000, 2002 『近代中国語の敬語システム—「陰陽」文化認知モデル—』白帝社
- 牧野成一 1996 『ウチとソトの言語文化学』アルク
- 脇山怜 1996 『英語表現のトレーニング』pp.67-82 講談社現代新書